

聖徳太子『勝鬘經義疏』

現代語訳と研究との抄録——「十大受章」の後半と「三大願章」と

——聖徳太子讃仰研究会『勝鬘經義疏』研究記録（抄）その六として——

小田村寅二郎

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——經典・十大受章の第三の「撰善法戒」の分類

就^テ第三有^ユ二一受^{ゾク}一名^ニ撰善法戒^ニ上亦分^ニ為^スレ三

第一直明^ニ不^レ忘^ス撰受正法^ニ一

第二积^ニ不^レ忘^ス一

農三結^ニ不^レ忘^ス一

右の『義疏』現代語訳

（「十大受章」を三つに分けた中の）第三番目には、「一受（一戒）だけあつて、「撰善法戒」と名づけるが、この所もまた、三つに分けられてゐる。

その第一に、直ちに、摂受正法を忘れない、といふことを説明してゐる。

その第二に、なぜ摂受正法を忘れないのか、といふことを説明してゐる。

その第三に、摂受正法を忘れない、といふことを結論的に述べてゐる。

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——經典・十大受章の第三の「摂善法戒」の中の三分類についての解説

終不忘失^{つひにしうじしやうぼうをぼうしつ}摂受正法^{せつじゆせうぽう}者^{せすトハ}。既云^{きふ}摂受正法^{せつじゆせうぽう}。是八地以上行^{はちぢにのナリ}。故云^ゆニ他分^{たふん}行^{ぎやう}。今勝鬘迹^{こんしやうもんじせき}在七地^{はななぢに}。而言^{をいふ}ニ不忘者^{ふしやう}。

但願^{フガント}得^トニ八地以上^{はちぢにのナリ}。故^ゆ。摂受正法^{せつじゆせうぽう}之心^{しん}暫^{しじろ}不^タ敢忘^{かんわう}。非^ズ言^{をいふ}ニ自得^{じとく}而不^レ忘也^{ふしやう}。

就^チ第二^に积^{スル}中^ニ。凡有^{ソリ}ニ三行三欲^{さんぎやうさんよく}。三行^{さんぎやう}是八地以上^{はちぢにのナリ}。三欲^{さんよく}謂^{いは}七地以還^{しちぢにのナリ}欲^{よく}。三行^{さんぎやう}者^ハ一^ニ摂受正法行^{せつじゆせうぽうぎやう}。二^ニ大乘行^{だいじやうぎやう}。三^ニ波羅蜜^{はらみ}行^{ぎやう}。七地以還^{しちぢにのナリ}非^レ不^ニ大乘^{だいじやう}。但大義未^{ナラ}顯^{けん}。何^{ナニ}者^ハ。七地以還^{しちぢにのナリ}斷^{たつ}結^{けつ}与^とニ乘^{じやう}二^ニ齊^{さい}。同出^{どうしゅつ}ニ三^ニ界^{かい}。而未^レ及^バ八^ハ羅蜜^{らみ}行^{ぎやう}。

地以上^{ちいじやう}冥^{めい}合^{ごう}衆流^{しゆりう}更^{さら}無^ム中^{ちゆう}異趣^{いしゆ}。故大義^{だいてい}不^レ明^{めい}。波羅蜜^{はらみ}者^ハ。名^なニ到彼岸^{たうはん}。七地以還^{しちぢにのナリ}亦^モ是^{シテ}無相彼岸^{むさうはん}。但未^レ能^レ並照^{へいしやう}。

故波羅蜜^{はらみ}義^ぎ亦未^レ彰^{しやう}。七地以還^{しちぢにのナリ}亦^モ修^{しゆ}万^{ばん}行^{ぎやう}。但一念^{いっぴん}之中^{のちゆう}不^レ能^レ齊^{さい}。故亦^モ不^レ得^レ攝受之名^{せつじゆのな}。所以^{ゆゑ}攝受^{せつじゆ}・大乘^{だいじやう}・波羅蜜^{はらみ}皆^{みな}在^ハニ八地以上^{はちぢにのナリ}。為^{ため}明^{めい}。三欲^{さんよく}即是願^{くわん}得^{とく}ニ此^{この}三^{さん}行^{ぎやう}之心^{しん}。故七地以還^{しちぢにのナリ}許^{もと}其^{その}有^{アル}也^{ナリ}。而此^{この}三行^{さんぎやう}皆是^ハ八地以上^{はちぢにのナリ}一心^{いしん}上^{じやう}用^{よう}。但隨^{たづ}義^ぎ立^た別^{べつ}名^な耳^{みみ}。故云^ゆ若^も忘^{わう}失^{しつ}法^{ぽう}即^{すなは}三行都^{さんぎやうと}忘^{わう}。三行既^{さんぎやう}忘^{わう}即^{すなは}三行之欲^{さんぎやうのよく}亦^モ皆^{みな}忘^{わう}也^{ナリ}。應^{おほ}有^{アル}ニ波羅蜜^{はらみ}欲^{よく}略^{りやく}無^ム也^{ナリ}。

列^{れつ}行^{ぎやう}則^{すなは}以^{もつ}攝受^{せつじゆ}為^{ため}先^{せん}。欲^{よく}則^{すなは}以^{もつ}大乘^{だいじやう}為^{ため}初^{しよ}。是蓋^{しか}逐^{しやく}便^{べん}。無^ム大^{だい}意^い一^{いつ}也^{ナリ}。

案^{あん}入^に以下^{いぎやう}。明^{めい}失^{しつ}行^{ぎやう}即^{すなは}起^{おこ}惡^{あく}也^{ナリ}。

從^{より}我^{われ}見^み如^{ごと}是^の以下^{いぎやう}。第三結^{だいさんけつ}不^レ忘^{わう}。言^{をいふ}忘^{わう}則^{すなは}致^{いた}禍^{わざはひ}。不^レ忘^{わう}得^{とく}福^{ふく}。故受^う不^レ忘^{わう}。

右の『義疏』現代語訳

終に「**摂受正法を忘失せず**」といふのは、「**摂受正法**」といふからには、これは八地以上の行であり、それゆゑに「**摂受正法**」は「**他分行**」と云ふ。現在の勝鬘は、現世に居るのであつてその現世における境地は、（八地までには至らない所の）七地に居るはずである。ただ、七地に居る勝鬘が、八地以上の行ともいふべき「**摂受正法**」を忘れずにある―不忘の境地に立つてゐるといふこと―、すなはち、七地に居て八地の行を「**忘れずにある**」といふことの意味は、「**摂受正法**を得たいと願ふその心」を、ほんのわずかの間でも忘れないで持続してゐることをいふのである。このことは、勝鬘がすでに「**摂受正法**の境地に立つてゐてそれを忘れない」といふのではなくて、「そこに到りたいと願ふ心を持続して忘れない」といふことである。（この所の違ひが大切なのである。）

第二の（「**不忘**」を）釈する中について、（經典原文では）およそ三行と三欲とが書かれてある。三行といふのは、「八地以上の行」のことを意味してをり、三欲とは「七地以下の欲」のことである。ここにいふ三行とは、一つには「**摂受正法の行**」であり、二つには「**大乘の行**」であり、三つには「**波羅蜜の行**」である。（考へてみるに）七地以下も大乘ではないといふことではないが、しかし大乘の「大」といふ意味が、（七地以下の段階ではまだ実践されてゐないので）まだ明らかに表現されてゐない。なぜさう言ふかといふと、七地以下の段階では、煩惱を絶つといつても、二乗の人と同じ程度にしかできないし、また、二乗の人と同じやうに三界（欲界・色界・無色界）から出ることはできてゐても、しかしそれも、八地以上の菩薩がどんな人々の居る世界に行つても、そこに居る大ぜいのさまざまな人の流れと一体に同化することができ、さらに、その流れ以外の趣きで分け隔てをすることがない（ほどに「和」の極致を現出できる）のに対して、七地以下の段階では、そこまではできないからである。さればこそ、大乘の「大」と

いふ意義が、七地以下の段階では、まだ明らかに表現されてゐない、といふのである。波羅蜜とは、「ざとりの彼岸」に到る」といふ言葉である。七地以下の段階の人もまた、（八地以上の菩薩と同じく）（人を差別することのない）無相の彼岸に達してゐるのだが、しかしその彼岸なるものは、（無相の彼岸とは言つても、いまだ、有相・無相の相對の上に立つ無相の彼岸に過ぎないために）いまだ有相・無相を「並べ照らす」まではできないのである。それゆゑに、波羅蜜の本当の意味は、いまだ明らかに表現されてゐないのである。七地以下の段階の人、（八地以上の菩薩と同じく）万行（万善の諸行）を修めてゐるのであるが、しかしながら、その一つ一つの行を實踐するに當つての一念の中に、万行に通ふ常に変りのない心をもつてすることはできないのである。それゆゑに、（七地以下の段階の行では）「正法を摂受する」といふ名をつけることが不可能となる。以上の説明によつて、摂受・大乘・波羅蜜（三行）は、三つともに八地以上の段階にあつてのみ、その意義を明らかに表現することが可能なのである。（次に）三欲といふのは、この「三行を得たいと願ふ心」を指して言ふのである。（それゆゑに仏世尊は）七地以下の人たちにも「その願ひの心」がある、とお認めになるのである。しかし、この三行（摂受・大乘・波羅蜜）は、みな八地以上の菩薩が、その一心を働かせてなし得る行である。三つの名に分れてゐるのは、その心の働きの意味に随つて別々に名づけられてゐるだけのことである。それゆゑに（經典原文にも見られるやうに）、法（摂受正法）を忘失すれば、たちどころに三行すべてを忘れることになつてしまひ、この三行を忘れてしまへば、たちどころに三行を願ふ心も忘失してしまふといふのである。（なほ經典本文をよく見ると、本文の中に「波羅蜜を欲はず」の語句があるべきなのに、その語句がない。（これでは三欲が二欲しか書かれてないことになるが、）しかしこれは、ただ省略して書いてないといふだけのことである。（註、太子は經典本文の「忘波羅蜜二者」と「則不欲ニ大乘」の語句の間に、「則不欲ニ波羅蜜」

不^ル欲^ハ波羅蜜^ヲ者^ハ」の語句があるべきなのに省略されてゐる、と気付かれて、以上のやうに書かれたと思はれる。)

(そこで經典本文をもう一度見直してみると、三行を列記してゐる時の順序は、(撰受・大乘・波羅蜜といふ順になつてゐて)「撰受」を一番先きに書き出してをり、三欲を列記する時には、(前記のやうに「波羅蜜」を略してゐるために、本来は「波羅蜜」から書き出すべき所を)「大乘」から書き出してゐる。この書き方は、思ふに、さう書く方が判り良いので、さう書いてあるだけのことで、特に深い意味はなく、三行三欲に變りはない。随^{シテ}所^ニ案^ニ入^リから以下は、三行を忘失してしまへば、たちどころに悪を起すことになることを説明してゐる。

我^ル見^ル如^キ是^ノ……から以下は、第三として「不忘といふことを締めくくる」所であつて、言ふところは、(三行を)もし忘失するならば禍ひが起るし、(三行を願ふ心を)忘れないで持続するならば、福を得るのである。それゆゑにこそ、(勝鬘は)この大受^{だいじゆ}を受けて決して忘れないのである。

(研究 1)

○義疏「非言自得而不忘也」の読み方について

法隆寺の『昭和会本』は「自ら得^{みづか}つるを忘れずと言ふに非^よず」と訓んでをり、これに対して花山信勝氏は「自ら(すでに)得たるを、而も忘れずと言ふには非ざるなり」(同氏校訂『勝鬘經義疏』四五ページ、吉川弘文館刊)と訓み、とくに「而」の字を生かしてをられます。ともに同じ意味でありますが「而も」と読む方が、意味が一層はつきりとれますので、その訓みを取りました。なほ、常盤大定氏も同じく「而も」と訓んでをられますが、「自」の字の訓みが異り、「自ら得たるを而も忘れずと言ふには非なるなり」(同氏校訂『大日本文庫・仏教編・聖徳太子集』二五ページ、春陽堂

刊)と訓^よんでをられ、「自ら」を「みづから」でなく、「おのづから」としてをられます。この点についても私たちの研究会では討議いたしましたが、常盤大定氏のこの訓みに従ひますと、「自然に身についた摂受正法を忘れない、といふのではない」といふ意味になつてしまひ、太子がご指摘なさらうとする一番大切なポイントが不鮮明になると思はれました。それだけに注意深く諸本を対比した次第であります。

かうした箇所に見られる太子のご指摘のポイントとして、私どもの研究会は、次のやうな感想を受けました。すなはち、この語句の前の句の中に「摂受正法之心暫^{しばらく}不^{あへ}敢^チ忘^レ」の如く「暫くも敢へて」といふ微妙な心理をうかがはせる用語が見えてをります。太子は、さらにその前の句で「八地以上の行を他分行」と言つてをられまして、われができることを「自分行^{じぶんぎやう}」と言はれるのに対して、われわれ凡夫にはできないことだからこそ「他分行」として区別なさつてをられるのです。この『義疏』の御著述の大部分が「他分行」に費されてゐるといふことも、重大な問題として受けとめられます。

太子の『勝鬘經義疏』を読んでまゐりますと、はじめに出てゐる「歎^{たん}仏^{ぶつ}眞^{しん}実^{じつ}功^く徳^{とく}章^{しょう}」、次のここの「十^{じゅう}大^{だい}受^{じゆ}章^{しょう}」、それとこのあとに出てくる「三^{さん}大^{だい}願^{がん}章^{しょう}」の三つの章だけが「自分行^{じぶんぎやう}」に関するもので、あとは「他^た分^{ぶん}行^{ぎやう}」に関するものになつてをることがはつきりうかがへます。

それやこれやを考へてまゐりますと、太子は、『十七^{じち}条^{じょう}憲^{けん}法^{ぽう}』の第十^{じゅう}条^{じょう}の中で「共に是れ凡^{ぼん}夫^ふのみ」といふ痛切な自己認識・人間観を御告白なさつてをられますが、「完成されたものへの御関心ではなくて、そこへ到らうとするプロセスの努力、その努力の持続、といふことの中に」、「実^{じつ}人^{じん}生^{せい}の意^い義^ぎ」を確認してをられるやうに押せられます。いまここに、「八地以上の行を他分行」と言ふと仰せられ、「暫^{しばらく}くも敢^あへて忘^{わす}れず」と言はれ、「自^{みづか}ら得^えつるに而^{しか}も忘^{わす}れずと

言ふに非ず」と続けられた御文脈の中には、われわれ凡夫には及び得ない世界であらうことを確認なさりつつ、しかも、「その世界を臨み見ながら一歩一歩、一つ一つを真剣に目指して行かうとなさる」御心境がうかがへるやうな気がしてまゐります。そこに、この世の人の進むべき道をお示しになつてをられるのでありまして、現代よく使はれる「人格の完成」とか「人格の完成を目指す」などの言葉の乱用から、結局は、理想と現実とを別々に扱つてしまひ勝ちな概念論議横溢の風潮とは、全く似て非なる厳しい道を切り拓かせ給うたものと偲ばしめられます。「自分ら凡夫には出来ないこと」と判つてあても、「他分行」を仰ぎ慕ひたまうて、現実の国民生活の帰趣すべき道をお求め続け遊ばされたのではなからうか、とかく拝察せしめられた次第であります。

(研究2)

○「無相の彼岸なれども」の「なれども」について

太子は『義疏』文中で書いてをられるやうに、「七地の段階の人も彼岸に到る」ことができ、「その彼岸は無相の彼岸である」とされながら、ただ単に「無相の彼岸」と言はれずに、そのあとに「なれども」と続けられて、「七地の境地と八地の境地とは、どのやうに違つてゐるか」を、そしてまた、「自分行において彼岸に到り得る限度と、他分行におけるその内容とがどのやうに違つてゐるか」を鋭く対比されながら、「求道」の在り方に誤りなからんことを、微妙なニュアンスでお示しになつてをられるものと拝察されます。

(研究3)

○「並べ照らす」のお言葉について

「並べ照らす」とは、「大和言葉」の感触があつて、「体験的な具体的な言葉」であります。その意味を味はひます

と、"すべてのものに価値の高低をつけずに、すべてのものに等しい価値を見出す"のが、"並べ照らす"ことではないでせうか。太子の御人生観・社会観の根底に、"人は、その社会的状況の如何にかかはらず、その人の心においては、すべて平等と観る"といふ"人間平等観の根本"が確立してをられた姿を、かうした箇所にも窺ひ得るやうな気がいたします。

(研究4)

○「衆流に冥合して異趣なきに及ばず」の御表現について

「冥合」の「冥」とは、「あの世」「暗い」「境がなくなる」などの意味合ひから、「冥合して」といふのは、「自他の差別がなくなる」「精神的に一体になる」といふ意味合ひをも含んであるやうに拝察されます。

(研究5)

經典原文では、「所案に随つて入り、永く凡夫地を越ゆるに堪任せず」と書いてあるだけであるのに、太子は「三行(註、摂受の行・大乘の行・波羅蜜の行)を忘失すれば」「たちどころに」「悪を起してしまふ」と指摘なさいます。何とも鋭い指摘と思はざるを得ません。

太子『義疏』訓点文(『昭和会本』)——經典・十大受章の第三の「撰善法戒」の中で「誓ひを立てて疑を断ずる」箇

所の四分類と解説

從「法主尊」以下。章中第三立誓断疑。就中亦有四。

第一仏前立誓。

第二從^ニ説^ニ是^ニ語^ニ時^ニ以下。明^ス雨^レ。花^ニ出^テ聲^ヲ為^シ証^ヲ。言^ハ有^レ聲^ニ必^ズ有^リ言^ハ。故^ニ以^テ聲^ヲ証^ニ言^ハ非^ニ虛^ニ。有^レ花^ニ必^ズ有^リ實^ハ。

故^ニ以^テ花^ヲ証^ニ行^ハ必^ズ果^シ。

第三從^ニ彼^ニ見^テ妙^ニ花^ニ以下。明^ス衆^ニ疑^ハ得^テ斷^ル。仍^モ發^シ願^ス。

第四明^ニ仏^ニ為^シ賜^ハ記^ヲ。可^シ見^ル。

右の『義疏』現代語訳

法主世尊から以下は、十大受章の中で（第一に「受戒の方便」を説明し、第二に「正しく受戒すること」を説明し、最後の）第三としてここで「誓ひを立てて疑ひを断ずる」のである。この第三の中もまた四つに分けられてゐる。

その第一は、仏世尊の御前で（勝鬘が）誓ひを立てる。

その第二は、説^ニ是^ニ語^ニ時^ニから以下で、（勝鬘の）「仏に証を立ててください」との言葉が語られると、天空から）花が雨のやうに降つて来たばかりか、（仏は）声をお出しになつて、証を立てられたことを説明してゐる。その意味は、「声が出された」といふことは、間違ひなく仏の「お心のうちが言葉になつて具体的に表現された」といふことである。仏がお声をお出しになつたといふことは、（勝鬘が立てた誓ひの）言葉が虚言でないことを、ご証明なさつたといふことである。花が咲けば必ず実がなるものである。それゆゑに、花によつて（勝鬘が立てた誓ひに基く勝鬘の）行ひには、必ず実がなるはずである（必ず実るに相違ない）ことを証明なさつたのである。

その第三は、彼^ニ見^テ妙^ニ花^ニから以下は、衆生が（この天花を見、かつ、天からの妙なるお声を直接に耳にしたことによつて）、色々の疑ひが一気に雲散霧消して、（勝鬘といつしよに行動したい、といふ）願ひを起したことを説明し

てゐる。

第四は、仏が衆生のために、その願ひの通りになれることを記された、と説明してゐる。經典原文のその箇所をよく見なさい。

（研究 1）

○「經典原文」の読み方で、『昭和会本』と異つた訓み方をした二箇所について

一つは、法隆寺の『昭和会本』では、「非ニ義饒益ニ」と訓んでおり、また『四天王寺会本』では、「非ニ義饒益ニ」と訓んでゐますが、この研究会では、昭和四十年、同四十八年、同五十二年にこの箇所について討議し、そのいづれも「非ニ義饒益ニ」と訓む方がよからう、といふことになりました。文意は、「現代語訳」の所に書きましたやうに、「仏の正しい教へが自分たちを助けてくださる、といふ道理を受け入れないで」の意味にいたしました。なほ、常盤大定氏は「非義饒益して」と訓んでをられ（同氏校訂『大日本文庫・仏教編・聖徳太子集』二六ページ、春陽堂刊）、花山信勝氏は、「非義をもて饒益して（安樂を得ざらん）」と訓んでをられます（同氏校訂『勝鬘經義疏』四七ページ、吉川弘文館刊）ことを付記いたします。

いま一つは、『昭和会本』『四天王寺会本』常盤大定氏とともに、「出ニ妙声ニ言」と訓んでゐますが、この研究会では「出ニ妙声ニ言」と訓むことにいたしました。文意は改めて書くまでもなく、訓みの通りとなりますが、この方がよからう、となりました。なほ、ここの所を花山信勝氏は、「妙なる声を出して言はく」と訓んでをられます。

（研究 2）

○「言^{いふこと} 有^レ声^{こゑ}必有^レ言^{げん}」といふことについて

この研究会の初期のメンバーであられた故桑原暁一氏が、昭和四十年のこの研究会で発言してをられたことをここに付記しておきたいと思ひます。桑原暁一氏は、子供が悲しんだり苦しんだりしてゐるときに、その子供が母親の姿を見ますと、「お母さん!!」と母親に声をかけるのが普通でせう。すると母親は、自分の心をその子供の方に集中して「はい!!」と答へます。その「はい!!」といふ声は、「言葉」には成つてゐない「声」に過ぎないものですが、子供の方は、その「声」を耳にただだけで、母親が自分に寄せる「心」を受けとめて、安心感にさそはれます。この関係は、子供は母親の「はい!!」と答へた一声の中に、母親の真心のひびきがこもつてゐることを知つて、それで安心するためでせう。かうしたニュアンスを思ひ浮べながら、太子のお言葉の「言ふところは、声あれば必ず言あり」を味はふべきではないでせうか。すなはち、真実の道に生きてをられる方の「お声」は、そのまま「お言葉を賜つたと同じ」と表現せられたのであらう、と思はれます」と、語つてをられました。

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——經典・「自分行」の中の第三番目の「三大願章の大意と三分類

從^{より}爾^{そこ}時^{とき}勝^{まさ}復^{また}於^お仏^{ぶつ}前^{まへ}以下。自分行^{じぶんぎやう}中^な第三^{だいさん}大^{だい}願^{がん}章^{しやう}。帰^き依^い受^{じゆ}戒^{がい}既^{すで}殊^{しゆ}於^お昔^{むかし}。故^{ゆゑ}願^{がん}亦^{また}更^{さら}發^{はつ}勝^{しょう}願^{がん}。遠^{とほ}期^き常^{じやう}住^{ぢゆう}法^{ぽう}

身^み一^{いつ}異^い於^お昔^{むかし}日^{にち}願^{がん}身^み滅^{めつ}智^ち以下。就^{すなはち}中^な開^{ひら}為^な三^{さん}。

第一^{だいいち}明^{めい}為^な願^{がん}作^{さく}願^{がん}。

第二^{だいに}從^{より}此^こ善^{ぜん}根^{こん}以下。正^{ただ}發^{はつ}三^{さん}願^{がん}。

第三從ニ爾時世尊以下。明ニ仏述成一

右の『義疏』現代語訳

爾の時に勝鬘復仏の前に於てから以下は、自分行を説く中の第三の三大願章である。今、勝鬘夫人が仏に對して行ふ「帰依」と「受戒」は、以前のものと異つてゐる。それ故に今、ここで發す「願」もまた、以前よりすぐれた「願」であり、この世を努め努めて、生死を超える永久生命（常住法身）に自分も入つて行きたい、と期するのである。それは、この身（肉体）が滅し、智（意識）もまた滅することによつて悟りを得たい、と願ふ小乗の理想とは根本的に異なるのである。この章の中が三つに分けられてゐる。

第一に、衆生を濟度しようとする三つの大願を願はうとすることを説明し、

第二に此の善根を以てから以下は、まさしく三つの「願」を發す。

第三に爾の時世尊から以下は、勝鬘夫人の「願」を仏が授記して、それを承認せられたことを説明してゐる。

太子『義疏』訓点文（昭和会本）——經典・三大願章の中の三分類の解説

以此実願者。通言以ニ我今將願ニ三大願一也。明下大士立レ懷非ニ但自為一必先為ニ物。故云ニ安慰衆生。一云実願者必行ニ其行一

就下第二正發ニ三願一中上自。有三願一

第一願。願レ得ニ正法智一。正法智者謂常住之智。

第二願。願^ノ下^ヘ為^ル衆生^ノ説^{カシ}上^ヲ。

第三願。願^ノ護^フ法^ヲ。

第一・第三二願。要就^ニ自行^ニ兼明^ニ化他^ヲ。中間^ノ一願因^レ明^ニ化他^ヲ并^ニ顯^ニ自行^ヲ。即興^ニ上^ニ十大受^ニ同^ジ。

右の『義疏』現代語訳

第一の此の実願を以てとは、三つの「願」を通じて言ふならば、「勝鬘夫人が今まさに三つの大願を（自分の心に）願はうとしてゐることによつて」といふ意味である。大乘の菩薩が懷^{おも}ひ（志）を立てることは、決して自分自身のためではなく、必ず何よりも先に衆生のためにするのである。それ故に「衆生を安慰す」といふのである。一説には、「実願とは、必ず願に伴ふ実践を行することである。」と。

第二のまさしく三つの願をおこす中が、自然に三つの願に分けられてゐる。

その第一の願は、「正法智」（正法を理解する智慧）を得たいといふ願ひである。「正法智」とは、謂^いはば生滅變遷^{へんせつへんせん}のない智、永遠に変わらない正法の智である。

その第二の願は、衆生のために法を説き教化してゆかうといふ願ひである。

その第三の願は、正法を護持してゆかうといふ願ひである。

右の第一と第三の二つの願は、その要点とするところは、自分自身の修行を主とし、兼ねて衆生を教化することを説明してゐる。中間（第二）の願は、衆生を教化することを主として説明しながら、併せて自分自身の修業をすることを願^{ねが}はしてゐる。このこと（自行と化他の関係）は、前述の十大受（章）の場合と同じである。

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——經典・三大願章の中の三分類の第三の解説

第三如来述成^ニ可^レ見^ス。

右の『義疏』現代語訳

第三に仏は、勝鬘夫人の願を授記して承認なさつた。そのことについては經典原文を見るがよい。

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——經典・三大願章の「三願」の意味について

而此三願並是住前之願。而言撰受諸願者。此但取住前諸願。非兼八地以上願也。

右の『義疏』現代語訳

しかしながら、この三つの願は、三願とも七地以前の求道者の願である。しかし（七地以前の求道者の願であるのに）その三つの願がもろもろの願ををさめ撰るといふのは、これはただ七地以前の願ををさめ撰るのであつて、八地以上の願を含むものではないのである。

（語釈1）

○身滅智亡^{（灰身滅智）}、身心を滅し涅槃寂静にはいること。蠟燭の炎を吹き消すやうに煩惱の炎を完全に吹き消して静寂な境地にはいる、の意であり、それは、小乗仏教が理想とした境地であります。

(語釈2)

○住前の願じゅうぜんがん 本来は、「十住」の前の「十信」の願のことです。この研究会では、「住(地)前」と解し、勝鬘の住地である七地前、と考へました。

(研究)

○「更に勝願しょうがんを發おこし、遠く常住じょうじゅうの法身ほうしんを期ぞす」について

太子のこの言葉は、大変に深い味はひを感じさせる言葉でありまして、太子は「道」をこの世に実現させるだけでなく、永久に「道」が行はれることを願つてをられ、そのお氣持がよく感ぜられます。前章での「研究」でも触れましたが、「この世において個人人格の完成を目指す」などといふ現代流の用語と、太子のこの言葉とは、余りにも「人生觀」の根本においての相違があるやうに思はれてなりません。